

3 『欽英』、分裂した自我の記録

キム ハラ
金 何 羅

1. 18世紀朝鮮の日記と自我

日記は、個人が経験を記録するさまざまな物書き^{クルスギ}の方式のなかで、相対的に柔軟で包括的な部類に属する。このような特性により、日記はその日記を書く人の性向と意図を反映する自由な物書きの場となる。その物書きの結果は、自らを物語る芸術的な文学作品にもなり得るし、意味あるテキストとなるために読者による識別と分類および再構成を待たなければならない一種の資料集として残されることもある。あるいは、この2つの性向を併せ持つ多面的な記録になることもある。

さて、わたしたちが誰かの日記を読む時、期待するのはこの物書きが根本的に持つ自己の叙事としての文学的特性、言い換えれば一種の内密性である。そしてこのような期待は、日記に記録された多様な特質を持った自我、またその自我と対話を交わす固有の個人としての日記作家に対する関心とつながっていると見える。このような見地からすれば、日記という物書き様式が近代文学の形成・発展期だと言われる18世紀以来、目に見えて勃興し大衆的に拡散したことは、文学史的に注目すべき現象だと思われる¹。

¹ これについては次を参照：Stuart Sherman, *Telling Time: Clocks, diaries, and English diurnal form 1660-1785*, Chicago: University of Chicago Press, 1996, pp.8-28；정하영 「조선조 일기류 자료의 문학사적 의의」『精神文化研究』65, 1996年；심경호 「한문산문의 기록성과 국문산문과의 관련성」『韓國漢文學研究』22, 1998年。

この時期、文学を前の時代と区分する標識の1つである「近代的主体としての個人」という問題を解明するのに、日記に表れた自我の形象を探求することが手がかりになることを、このような現象が示唆しているからである²。

18世紀朝鮮において日記が記録の一形態として普遍化したのは、「時憲曆」という東アジアの曆法体系およびそれを反映した印刷媒体である「冊曆」の大衆の普及と対を成す社会的現象である³。本稿で扱う日記作家である兪晩柱(1755-1788)の家系を例にとっても、彼の祖母と養父および10代の少年である息子が冊曆を媒介にして生活日記を書いていることがわかる⁴。この場合、日記は冊曆の余白にその日の重要な事柄をメモする形で記録されるため、規則的で持続的ではあるが、かなり簡略である。

一方、時憲曆が提示する時間体系を遵守はするが、冊曆に直接記録せず、別途の日記帳を用意してもう少し積極的に自我を保存しようとした例も多数発見される。先に言及した兪晩柱および彼と同時代人である盧尚枢(1746-1829)、鄭元容(1783-1873)など、物を書くときに漢文を使用する士大夫の知識人男性と範疇化できる彼らの日記がまさにそれである。これらの日記は個人の人生と結び付いた長編の著述として、短いもので13年、長いものでは91年に及んで一日一日を細かく記録しているが、このような記録はそれ自体が日記を書く人の存在を、意味をもって構築しようとする意

² このような観点は日記や小説についてのジャンル並列的な研究ともつながり得る。これと関連して Patricia Meyer Spacks の *Imaging a Self: Autobiography and Novel in Eighteenth-Century England* (Cambridge: Harvard University Press, 1976) が参考になる。この研究によれば、18世紀イギリスの自叙伝、日記、小説の作家たちは根本的に同一の課題、すなわち、物書きにおいて始終一貫して自我を創造していた。それにより、以前には知られていなかったジャンル間の連続性を捉えている。

³ 정성희 『조선시대 우주관과 역법의 이해』 知識産業社, 2005年; 金何羅 『『欽英』 일기에 재현된 경험적 시간의 의미』 『韓國漢文學研究』 41, 韓國漢文學會, 2008年.

⁴ 金何羅 『유만주의 『흠영』 연구』 서울大學校博士學位論文, 2011年, pp.34-35.

図の反映である。

しかしながら、このすべての日記からわたしたちが期待する「個人の内密な自我」を発見できるわけではない。たとえば盧尚枢の日記は家系運営についての日誌という性格が色濃く、そのなかで記録者の自我は家長という形を成している。しかも盧尚枢が待望のすえに官職を得た後の日記には、「我」のみならず「家」もなくなり、公的な官職者としての自身のみが存在する⁵。また文字を知らない幼年期の経験までさかのぼって著すことで91年にわたる日記を記録した鄭元容の場合、彼の自我はほとんど変わることなく官吏という公的な職分により規定されているが、これは72年間官職生活を送り30年以上宰相を歴任した彼の生涯を反映した結果だと思われる⁶。つまり、個人の生涯と結び付いて記録された18世紀朝鮮の日記はおよそ国家や家庭という公と私の領域区分と、そのなかにおける所作を明白に反映した官人と家長という自我を主として示しており、それを越えたり逸脱した自我の多様な形象を探し出すことは容易ではない。これはおそらく朝鮮社会に支配的であった儒教特有の現実主義的人間観が作用した結果だと思われる。

このようななかで、兪晩柱が21歳〔韓国では一般に年齢を数え年で記すが、本稿でもそのまま訳出した〕になった1775年の初日から34歳の誕生日を前にして死ぬ^{ひとつき}一月前までの13年間、日記を綴り続け、自らこれを本に編んで題を付けた日記『欽英』^{フムヨン}において目撃することになる自我の形象は、たいへん異例である。盧尚枢や鄭元容が、堂々とした家長や官人として、自らについては特別な懷疑を表さなかったのに対し、兪晩柱は公私の領域を浮遊し、そのどこにも明白に属さないまま自身の存在に疑問を抱き、時には露悪趣

⁵ 문숙자 『68年の 날들, 조선의 일상사 : 무관 盧尙樞의 일기와 조선후기의 삶』 너머북스, 2009年, pp.19-20.

⁶ 정원용, 허경진 訳 『國譯經山日錄』 보고사, 2009年.

味に近い自己否定の言述まで試みているのである。兪晩柱のこのような姿は相当部分において彼が経験したアイデンティティの混乱に起因したものであるのだが、このようなアイデンティティの混乱は「自分は誰なのか」という根本的な疑問につながり、『欽英』はこの疑問に対するさまざまな層位の探求と解明を試みる場となっている。本稿では18世紀朝鮮の文人兪晩柱が経験したアイデンティティの混乱とそれによる自我の分裂の様相を、彼の日記である『欽英』を通じて探ろうとするものである。

2. 歴史家になりたかった挙子

エゴ・アイデンティティ (ego identity) とは、個人のなかに持続的な同一性が存在することを意味すると同時に、その個人が自らのある本質的な特徴〔に対する認識〕を他者と持続的に共有することを意味する言葉である⁷。つまり、エゴ・アイデンティティは自らが規定し認識する自己の本質的な局面であり、社会的に理解され得る形態の自己規定ということである。このようにみると、エゴ・アイデンティティは一種の社会的自我として、公私それぞれの領域のなかで個人が存在意義を求める1つの方式であるといえることができる。それは主に希望する職業と結びついて表現されがちで、また未だ自身の職分が確定していない時期の青年においてはエゴ・アイデンティティに対する探求が試みられる余地が多いといえる。

兪晩柱も初期の日記においてすでにエゴ・アイデンティティに対する探求を試み、明白な結論を出していることが注目される。日記を書き始めた1775年の兪晩柱は、ソウルの南大門近くに居住する21歳の士大夫男性であり、3歳になった息子を持つ既婚者であり、とくに公的な職分のない^{コジヤ}挙子

⁷ 美國 精神分析學會編, 이재훈 外 譯『精神分析用語辭典』韓國心理治療研究所, 2002年, p.415.

〔訳注：科挙の受験をめざして儒学を勉学する者の肩書〕として、しばしば科挙に
応試しては落第していた。時が流れるにつれて彼とその息子の歳は増えて
いくが、日記を書いている彼の対外的な身分は大きくは変わらなかった。

ところで、このような境遇の彼が自らのアイデンティティを構成する最
も重要な要素とみなしていたのは、誰かの夫や父であるといった家庭内の
地位、あるいは官僚予備軍という立場ではなく、自分が読書人であり文を
書く人だという点であった。

人はいつも何かに没頭している。大きなことに没入すればそのこと
で心も大きくなり、小さなことに没入すればそのことで心も小さくな
る。正しいことに没入すればそのことで心も正しくなり、奇異なもの
に没入すればそのことで心も奇異になる。清濁や古俗もまた同様であ
る。俗なものに没入して古雅なものになったり、あるいは小さな事に
没入して大きくなる事はない。

わたしが自らについて考えてみれば、いつも大きく正しく清く古雅
なものに心を置いているが、わたしがすることを顧みれば、大きくも
正しくも清くも古雅にもなることができない。これはなぜか。心が堅
固でないからである。

しかし幸い粗雑な者とは交わらず、博奕〔囲碁や将棋など〕に夢中にな
らず、酒や女に溺れず、程式〔科挙試験の勉強〕にも没頭しないでいる。
この4つを幸いにも免れているので、平素することといえば、物書き
一筋に没入しないわけにはいかない。切磋琢磨し奮起し精進できずに
いるとはいえ、それでもすでに先の4つを免れることができたので、
この一筋に没入したのである。

そのおかげで、わたしは文を書き編む方法をあらかた会得すること
になった。ある時には人が浅はかに見ることをわたしは深く見、また
ある時には人が漫然と捨てるものをわたしは注意深く集める。そのな

かで巧妙な解が生まれ、著作の要旨を把握することができるようになる。そうして数百巻の新しい本を作り、四部〔経・史・子・集の4種に分類された書物〕をまとめ、千古の昔からのものを包括することができるのとひそかに期待するのだ。生きているうちはわたしの心を帰依することができ、死んだ後はわたしの名が残ることになるので、この生涯を虚しくすることがないのである。(1778年10月1日)⁸

青年期特有の理想主義と自己省察の目立つ上記の引用文は、兪晩柱が24歳の時に書いた日記の一部である。人の心が、ある堅固な実態ではなく、その向かうところに従う非定形のものだという前提のもと、「大きく正しく清く古雅な」ものに心を置いていると言い、自身の志向を明らかにした。

また兪晩柱は自分の理想と現実との差を省察し、その差を克服する方法を模索してもいる。志向は明白であるが、意志が軟弱で理想に近づけずにいる自分の状態を振り返り、望まない交遊や趣味生活、快楽的な暮らし、立身出世のための勉強など、4つの妨害要素を遠ざけることが理想的な状態を実現する道となるという確信を示している。彼はこのように人間関係や趣味などから潔さを守り、事実上自らの当面の課題である科挙試験にも

⁸ 「○人之心必有所入。入於大、則所爲隨而大；入於小、則所爲隨而小；入於正、則所爲隨而正；入於奇、則所爲隨而奇、清濁古俗亦然、未有所入者、俗而能爲古者、亦未有能爲大而入者小也。余自念、大者正者清者古者、心未嘗不入、而顧其所自爲、則未能乎大也、未能乎正也、未能乎清也、未能乎古也、所以者何？心不固也。然幸免於與雜類交、與博奕昵、與酒色沈、與程式汨。四者既幸而免焉、則平居所爲、不得不入於翰墨一路、雖不能刻磨治勵奮發精進、亦既得四免而入一路矣。於是、粗有得於編課之法、人之淺視者、我或深看；人之漫棄者、我或謹聚。於其中妙解生焉、義例起焉。竊思因此、而成就數百卷新書、範圍四部、包括千古、生時心有依歸、歿後名以流傳、庶不爲虛此生也。」(1778年10月1日)

段落が始まる箇所にある「○」は、『欽英』において話題が変わることを表すために、著者兪晩柱本人が筆の尻で捺して表示したものである。また括弧内の数字は、該当引用文が、奎章閣の影印本『欽英』1778年10月1日条に記載されていることを表す。『欽英』で引用する日付はすべて陰曆である。以下同様。〔訳者注：漢文の解釈にあたっては、筆者が韓国語でどう解釈したかを汲み取りながら、あらためて日本語訳した。〕

没頭しないなど、自身の直面する社会的条件から一步退き内面を省みることで、自分の固有性を確保すべき道を探ることができたと吐露している。彼の言う「自分の道」とは、他人と区別される自分だけの目で本を読み、文を書き、不朽となることであり、これはまさに生と死とを包括し自分の存在が意味を得る道であった。つまり、個性を込めた文章を書くことが自我を実現するための具体的な道として提示されているのである。

ところで、彼が追求する個性的な物書きとは、狭い意味での文学に限定されるものではなかった。彼は物を書くのみならず、「数百巻の新しい本を作り、四部をまとめ、千古の昔からのものを包括」しようとしたのであり、長い時間をかけて人間が蓄積した知識をまとめる巨帙の本を編みたいという望みを述べていた。つまり、広い意味での「学問」を、生きがいを求める道として選択したのだといえる。

当時、朝鮮の学術体系のなかで知識人は、文・史・哲が未分化の統合的な状態で勉学と物書きを進めることが一般的であったが、兪晩柱が学問的な著述活動に関連した自らの願いを披露し、経史子集をまとめると述べたのも、そのような状況を反映したものと思われる。このように彼は文・史・哲をまとめた統合的な人文学に根を置きながら、そのなかでも1つの専門的な方向を追求していることが注目される。つぎは彼が23歳の時に書いた日記の序文に該当する部分である。

わたしが自らを省みるようになって以来、いつも心身にこびりついたまま消えない火のように忘れられないことが1つある。それはすなわち史学である。(1777年6月20日)⁹

このように史家になろうとする熱望を「消えない火」に喩えて告白する

⁹ 「○余自省事以後、有一事横着腔子内、耿耿不置、則史學也。」(1777年6月20日)

ことで始まるこの文は、その熱望を実現するための方案、現在自らが置かれている条件などを具体的に検討することにつながっている。史家になるためには何よりも客観的で公正な視角が必須であり、歴史家として文を書く才能と力量、解釈能力、博学、資料を見る眼目がなければ、史学をすることができないと言い、史家が持つべき資質を列挙した後、『春秋』の時代から南明史〔訳注：南明は明朝滅亡後にその遺王らが立てた政権〕に至る中国の歴史に関連して、必ず参考とすべき史書の目録を提示し、それまで自らが踏んできた歴史学習の段階を点検している¹⁰。最後に彼は史学を志そうとする者に要求される条件を次のように提示している。

古今、中東〔中国と朝鮮〕を問わず史学を志す者になくなくてはならないものが4つある。歴史を考察し正すための資料となる書籍、ともに歴史を講ずる同志、歴史家として暮らせる官職、歴史書を編む文章力がそれぞれである。書籍が多様でなければ粗略で疑わしいことが多くなり、ともに講ずる者がいなければ見識が固陋なものとなり、史官でもないのに歴史書を編纂すれば軽率で僭越なことになり、文章力が豊かでなけ

¹⁰「蓋嘗論之、《有公心公眼、然後爲史學。》亦爲眞史學、未有心眼不公、而能爲史者也。然自古史官之公心眼者、亦無幾、居今之世、能透得古史之公心眼、必優爲史者也。余自度不及古人者、有五曰《史才也、力量也、識解也、博學也、眼目也。》無此五者、雖有志、亦何以爲史哉？雖然、世或有諛聞小生、以淺見薄才、掉臂青汗、妄意刪定、輕加褒貶。不知史學之爲何學？古史恥之、余亦恥之。乃余所欲則有之矣、史之大法、莫加乎『春秋』、爲史學而不知『春秋』、是遺本之徒也、則『春秋』四傳之長短純駁、當卞也。編年爲史家之正制、不可廢也、則『續綱』之不及『綱目』、『綱目』之上接『春秋』義例、當訂也。瓊山『正綱』、比『綱目』益嚴、則兩書之書法、當考也。『二十三史』爲列朝史官之所修、則其優劣佳惡、當會通也。蘇文定之『古史』、純乎太史公、則其立論當參考也。『東都事略』、或稱其勝於『宋史』、則其書例當參看也。『明史』未修之前、有王弇州・鄭端簡諸公『史傳』、則其文當參訂也。南明三帝之蹟、當詳也；清人刑政之大略、當知也；前朝恭愍之際、當講也。諡法與史法、相表裏也、則歷代諡法之公私稱濫、當訂史傳也。凡此皆史學之大端、而不可廢者也。」(1777年6月20日)

れば言葉が貧弱で見苦しくなるからである。(1777年6月20日)¹¹

彼が史家の条件として挙げた4つを見てみると、当時彼が必要としていたものが何であったのかが明白になり、彼が抱いていた熱望に比例するように自我実現のための具体的な苦悩も深かったことが想像できる。望みの書籍を手に入れるための物質的基盤や、史書を著述するだけの文章力のような個人的資質とあわせて、彼が重要と考えたのは、知識を共有できる史学者の集団と自分の学術に意味を与えてくれる公的地位、つまり学術的なコミュニケーションや業績の公認のような社会的な意味付与に関する条件であった。兪晩柱がこれに力を込めて言及していたことから、集団が共有する理想と自らのアイデンティティとの間の内的連帯を保とうとする彼の意図を読み取ることができる。

兪晩柱は青年期にすでに学問的な著述活動として不朽を追求し、その著述活動はとくに歴史に集中したいと言い、エゴ・アイデンティティを確固たるものにした。ここでもう1つ注目すべきことは、このようなアイデンティティの確立に彼の個性と趣向が明白に反映されているという点である。先に、望まない人間関係や趣味生活を自我実現の妨害要素と規定して排除し、固有の視線をもって読書し学問的な著述活動をすることに生きがいを求める兪晩柱の姿を確認した。このような彼に、学問を自身の道として選択した理由を訊ねれば、その答えはおそらく趣向や好き嫌いの問題に収斂することになろう。特定の人や趣味活動の好き嫌いに理由がないように、文の読み書きが好きなことも特別な理由を挙げて説明することはできない。それに似て、彼がこれほどまでに切実に歴史家になろうとしたのも、根本

¹¹「母論今古**中東**、有不可不挾者四、曰：訂史之書籍也、講史之同志也、居史之職官也、編史之筆札也。書籍不博、則略而疑；講討無人、則陋而固；汗簡匪職、則輕而僭；筆札不給、則儉而苟。」(1777年6月20日)

的には歴史が好きだからであった。歴史家としての志向を記して1年ほど経った頃、彼は「『綱目』〔司馬光が編んだ史書『資治通鑑』を朱子学的に再編纂した『資治通鑑綱目』のこと）に向かうと心が楽しくなるが、なぜそうなのかわからない¹²という言葉を書いているが、この言葉を通して彼の歴史に対する興味が論理的に説明し難い個人の趣向と結びついていることが分かる。

このように兪晩柱のアイデンティティ構成と自我実現の努力は、個性に根をおき自身の好きなことをするという動機から出発することで、自発的な真正性を持つようになる。彼は学問的な著述をして歴史家になろうと絶え間ない努力を注ぎ、現実と理想との間の乖離に苦しむことはあっても、自分のこのような理想に対して無価値なものとして懐疑することはほとんどない。こうしたことから彼の人生は理想を追求する自己の性格の連続性を維持するための意識的な奮闘の過程となった。誰ひとり支援も認定もしてくれない歴史家としての任務を遂行する31歳の彼は、司馬遷が『史記』を著述する時の心情を思い描いたりもした。恥辱的な刑罰を受け幽閉された極度の不幸が司馬遷の偉大な歴史書を生んだ背景となったという逆説を咀嚼し、兪晩柱は、誰も自分に課しておらずとも自らが負う史の任務が、世上の任務を負うことよりも難しいのだと何度も述べているのである¹³。

先に歴史家が備えるべき4つの条件に言及したが、このなかで史料を求

¹²「○對『綱目』則心自好、吾亦未知何爲而然也。」(1778年10月11日) 一方、これに先立ち彼は「歴史書を見ると人の心が最も愉快になる。人が治乱と興亡を過ぎて行くのを見ると、まるで金銅仙人が歳月を越えるようであり、千古の善悪と是非を見れば、まるで訟事を担う官吏が判決を下すような気分である(觀史最快人意、閱去人代之治亂興亡、如銅仙之度世、見得千古之善惡是非、如訟官之執案。)」(1776年5月13日)と言い、歴史書を見ることの愉快な理由として時間を観察し善悪と是非を公正に判決できるためだと言うなど、読書が触発する精神的状態を挙げている。

¹³「想司馬公忽下蠶室幽廢終生、於是誠極不快意、故乃有如此極快意之文章、此亦造化者、一大機緘、公乃適當其推盪中耳、命也夫、命也夫！○擔當史務之難、甚於擔當世務之難、惟深於史者、而後知之、亦當與深於史者、道也。」(1785年8月1日)

め検討し、歴史書を著述するだけの文章力を備えるという2つの側面において、兪晩柱は一定の成果を得たと思われる。これは彼が関連書籍を熱心に求め、史料分析や批判に該当する文を日記に多数記載していることから確認できる。

既存の研究において最もよく知られていた兪晩柱の面貌は、おそらく幅広い多読家であり、本の価格および入手過程まで詳細に日記に記録したまめな蔵書家としての姿であろう¹⁴。しかし彼がこのように本に人生を捧げるようになった動機については、18世紀朝鮮知識層の一部を風靡した博学への熱望、明清の小品文や小説に対する愛好を除いて、明らかになったことは未だ少ないようである。

実際、兪晩柱が購入したり、借りるために努力を注いだ本のなかで歴史書が占める比重は相当なものである。一例として彼が60両(=6000文)の大金を出して購入したものと知られている『合綱』も中国の歴史書である。彼によれば、この本は『徽綱』30冊、『続綱』14冊、『徽綱發明』4冊など、合わせて48冊で構成されているが¹⁵、冊数と前後の項目から推し量れば、これは徽国公、すなわち朱熹の『資治通鑑綱目』、明の商輅の『続資治通鑑綱目』、そして宋の尹起莘の『資治通鑑綱目發明』をそれぞれ指しているものである¹⁶。

¹⁴ この点に関連して次の論文および単行本が参照になる。강명관 「한 지식인의 독서체험과 조선 후기 문학」 『大東漢文學』 13, 大東漢文學會, 2000年; 기명진 「조선 후기 중국 사행과 서책문화」 『19세기 조선 지식인의 문화지형도』 漢陽大出版部, 2006年; 김영진 「조선 후기 서적출판과 유통에 관한 일고찰」 『東洋漢文學研究』 3, 東洋漢文學會, 2010年; 김영진 「『欽英』에 나타난 유만주의 독서생활과 서지학적 성과」 韓國學中央研究院 碩士論文, 2008年; 홍선표 外 『17, 18세기 조선의 외국서적 수용과 독서실태』 혜안, 2006年.

¹⁵ 「○冊書以『合綱』全帙至、計『徽綱』爲三十冊、『續綱』爲十四冊、『徽綱發明』爲四冊、合爲四十八冊。擬停丸劑、而以其直代易之、先越『綱』直。」(1784年10月10日)

¹⁶ このように推測する根拠は次の通りである。第一、『欽英』1784年11月14日条に「續閱宋人『徽綱發明』、其序云云」という句節が出てくるが、これによれば『徽綱發明』は宋の人が書いた本である。そして朱熹の『資治通鑑綱目』を根幹として新しい見解を加えた『資

大金を出して購入しただけでなく、彼がこの本を買ったあとで最大の満足感と喜びを表し、たいへん愛蔵していたことは¹⁷、この本が歴史家になるうとする自身の理想に関わる必須の史料であったからである。以後、この本の内容は彼の日記に頻繁に引用されるが、それは彼がこの史書をもとに早くから1人きりで進めていた中国通史である『三綱』の編纂に拍車をかけることになったという状況に起因する。彼は朝鮮において刊行された『資治通鑑思政殿訓義』と、上に言及した中国のさまざまな史書とを比較検討し、客観的な史料批判を行い、その成果を日記に記載したが、このなかに注目すべき部分が少なくない。

しかしこのような彼の個人的な努力が社会的な関係のなかで評価を得たとは見なし難い。先述した歴史家が備えるべき4つの条件のなかで、学問的同志や歴史家の地位といったものは彼がついに得られなかったものであった。彼は、見識があり社会的影響力をそなえていると思われる周辺の人たちに、歴史家の理想に関する自分のアイデンティティを積極的に表し、彼

治通鑑綱目發明』の編著者である尹起莘は宋代の人物である。また奎章閣韓国学研究院に所蔵されている同書の諸版本のなかには4冊本があり、兪晩柱の言及と一致する。第二に、『続綱』が指称する本である『続資治通鑑綱目』は一般的に『続綱目』であると言われていたが、明代の商輅が朱熹の『資治通鑑綱目』を継承し、この本に載せられていない北宋太祖代から元の順帝に至るまでの歴史を扱ったものである。また奎章閣韓国学研究院に所蔵されている『続綱目』の諸版本のなかには14冊本があり、兪晩柱の言及とも一致する。第三に、ここに言及された『続資治通鑑綱目』と『資治通鑑綱目發明』は各々扱っている時期や内容の側面において『資治通鑑項目』を補完するという性格が強いため、1つのシリーズとしてまとめることができ、これに兪晩柱がこの3冊をまとめて「合綱」すなわち『綱目』の総合と呼んだとすれば、理解し得るであろう。

¹⁷『合綱』を見て書楼に置く と真に満たされまるで車で金や穀を得て来たが如くである。思うに、錢宗伯（錢謙益）は元々趙文敏（趙子昂）が所蔵していた『漢書』を得て大切な宝としていたが、これに勝るものではないだろう。「欽英之記」（兪晩柱の蔵書印の1つ）を毎巻の最初の頁に捺し、本を校正したことを祝う曲讌を開き古詩を作り記録して置く。（檢藏『合綱』于樓中、宗充然若有獲、勝於鞶金輪穀。想錢宗伯、初得趙文敏『漢書』、其宝重之也、當不過斯。擬刻欽英之記、鎮每卷首、設定書曲讌、製古詩以識之。）（1784年10月10日）

らのなかに学問的同志を求めようとしている。彼はとくに妻の弟の婚戚で学問的教養を備えた呉允常^{オコンサン}（1746-1783）、呉熙常^{オヒサン}（1863-1833）兄弟と持続的に交遊しながら、史家になろうとする自身のアイデンティティを強く表明し、彼らが自分の志向を理解してくれることを期待した。しかし彼らは兪晩柱を史学に興味を持った儒生と認識する程度にすぎず、学問的同志となつてはくれなかった。

兪晩柱は、死んだ前妻の親戚であり伝統ある名門家として自分の家よりも格が高いと思われた呉允常家から主に史書を借りて読み、自ら書いた歴史評論に相当する文章を送って評価を請うた。一例として、1777年7月25日に『読史故』という40段落余りの文を書いたのだが¹⁸、内容が確認できないこの文は「歴史書をなぜ読むのか」という主題に関する一種の歴史評論と推測される。彼はこの文を1巻の本にまとめて生涯大切にしており、自分の志向を理解できる少数の人たちにときおり見せたことがある¹⁹。ところで兪晩柱はこの『読史故』を書いたその翌日、この文を校洞^{キョドン}の呉允常に送って叱正を請い²⁰、呉允常は1週間ほどでこの文を兪晩柱に返した²¹。

その後、呉允常は30代の若さでこの世を離れたが、兪晩柱は死んだ妻の実家である校洞との関係を持ち続けた。とくに呉允常の弟である呉熙常の学問と見識を高く評価し、自分の息子である兪久煥^{ユグファン}（1773-1787）を彼のところへ送って経書を学ばせている。彼は1786年初、校洞を訪問し呉熙常と

¹⁸ 「○書『讀史故』四十餘段。」（1777年7月25日）

¹⁹ たとえば、彼は末年に本を媒介に緊密に交遊していた友である蔵書家閔景涑にも自身が書いた詩や日記とともにこの『読史故』を見せている。「○取第二箇中「除夕」大篇一軸、『欽英乙巳別部』初本第三一冊、『讀史故』一冊、『子順文草』一冊、合爲一裹。又取雜毫八枝送于凜。書報《念識高明、以後獲閱異書、凡幾種矣。如此而猶塗抹皮膜、不復罄我之有是非、相報之道理也。故不嫌於亂墨胡草不整齊無倫次、而如干呈似。》」（1785年12月24日）

²⁰ 「○還『續綱』二十七冊于校洞、兼付『讀史故』。」（1777年7月26日） 校洞で借りていた『続綱目』を返し『読史故』を合わせて送ったのである。

²¹ 「○校洞還『讀史故』。」（1777年8月2日）

談話するなかで「『資治通鑑綱目』は偉大な歴史書ではあるが、上は威烈王（戦国時代周の王）以上を包括しておらず、下は芸祖（宋の太祖）以下に言及していないので、まだ全史とは言えない。よって威烈王よりも上古時代である堯の時代にさかのぼり、芸祖から最近世史である永暦年間に至るまで包括する歴史書が必要だ」とし、自身が編纂している『三綱』の著述意図について言及した。そしてこの対話の終わりに呉熙常は例の『読史故』を見せてほしいと要請している²²。のちに重要な儒学者として成長することになる20代の呉熙常は、兪晩柱の作業に関心を持ち進行状況をとときどき訊ねていた。

それ以外に兪晩柱の交遊人物として、やはり名門家の子弟であり後に高位官僚になる南公轍^{ナムゴンチョル}（1760-1840）も、呉允常に送った手紙のなかで、兪晩柱について「経史を広く涉獵し、とくに明末の歴史についてよく知っている」²³という評価をしている。父兪漢雋^{ユハンジュン}の交遊人物で、老論系〔朝鮮時代の党派の1つ〕の高位官僚であった李敏輔^{リミンボ}（1720-1799）も、兪晩柱の死後、彼の文集に寄せた序文に、史学に注いだ彼の努力を高く評価した²⁴。このように社会的によく知られた彼の知人たちが兪晩柱の特長として史学に言及している例を見れば、兪晩柱の社会的自我の核心に史家になろうとする理想が込められており、彼が自分のこのような理想を周辺に積極的に表現していたことがわかる。

結果的に兪晩柱は社会的な公認された史家、すなわち自身になろうとした史官にはなれなかった。史官になるためには、自身が「没頭しない」と

²²「議『綱目』爲史中之經、治史學者、舍『春秋』『綱目』、則無以爲學矣。第『綱目』上無威烈以上、下無藝祖以下、爲未成全史。如『綱目』威烈以上至于堯、『綱目』藝祖以下至于永曆、竊嘗有意而未果也。（…中略…）熙求更示『讀史故』。」（1786年1月10日）

²³南公轍『金陵集』卷10、「與吳士執允常」。「伯翠（兪晩柱の字）博涉經史、尤習於啓禎間遺事、致之山色水聲之中、聞其議論、亦一趣事。」

²⁴李敏輔は兪晩柱の文集『通園藁』に寄せた序文である「肆力於百家諸教、卒歸於史學」と、兪晩柱の学術が史学を帰依所としたと述べている。

述べた科挙試験に及第して官僚となり、^{チュンチュグァン}春秋館に赴任しなければならないが、彼は一生を挙子の地位に留まっていただけで、生涯の努力にもかかわらず在野の歴史学者の地位から抜け出すことはできなかった。さらに彼の学問的な努力と『三綱』という本に代表されるその成果物は、当代の極めて限定的な人たちに知らただけで、現在にまったく伝わっていない。

しかしながら史家になろうとした欲望と、それを実現しようとした努力がどのような意味を持ったものなのかを、彼の日記から探し出すことは難しいことではない。一例をあげれば、彼は人生の末年に「東邦〔朝鮮〕の歴史文献を収集し、ただ精密に選択し該博的に記載する一方、按断〔考えて断ずること〕や剩語〔余計な言葉〕をくわえることはせず、百年後、千年後の立派な歴史家のために残しておいて、彼らが自ら公正な是非を選べるようにすることに、まず道を開いておきたい」という希望を表明している²⁵。ここに見られる兪晩柱の言及は、前近代の朝鮮社会においてつねに歴史学に没頭してきた個人が成し得る意味のある到達点がどのようなものであったのかを考えさせてくれる。

歴史家として兪晩柱の出発点は、朱熹の『資治通鑑綱目』のような価値評価を主とした前近代的歴史書を学ぶことであり、その目標は国家の価値理念のために服務する「史官」になることであった。しかし彼は史官になる通路を得られず、その歴史研究はまさに学問のための学問となった。もはや自らの学問を通して公的な影響力を持ち得ないという展望に達したこのような状況において、彼は歴史研究の方向と目的について、最初の出発点とは異なる見解を表明した。それは中国の歴史ではなく朝鮮史を扱おうとすること、歴史的事実に対する価値評価よりは客観的な史料の収集を通

²⁵「抑有一術焉、做得幾件好冊子、則猶可爲惠於後人。思摹集東邦乘獻、止擇之精而載之該、不作按斷剩語、以留後千百年之良史氏、使自擇公是非、以開先路、如『通鑑長編』『東都史略』之書、可也。」(1786年12月20日)

して正確な事実を明らかにすることが優先的であるということ、また自身が追求しようとするこのような方向の歴史叙述が「後代の史学者」という特定の専門集団を念頭に置いた行為だということに要約できる。

このような彼の見解に含まれているものは、実は19世紀以後に近代歴史学を風靡することになるランケ（*Ranke*, 1795-1886）の歴史主義と相通じる点が少ない。とくに按断のような論贊（史評）の型式を蛇足だと考え、客観的に史料を選択し、史料をそれ自体として語らせるという兪晩柱の見解は、歴史的事実の個別性と独立性を強調し先入観や利害関係から離れて過去の事実をありのままに示すべきだという歴史主義の核心的な主張と一脈を通じており、つまるところ独立した分科学問としての歴史学に向かっているものだと言える。

とはいえ、彼がこのような近代歴史主義の方向性を具体化した歴史書は残されていない。むしろ彼が書いた日記『欽英』は、政治史に限定されず、日常史の些細な局面まで貫徹される幅広く多様な歴史を包括しており、近代歴史主義の限界を克服しようと試みたフランスのアナール学派の歴史叙述を連想させる²⁶。前近代と近代、脱近代の歴史学を往来するこのような興味深い矛盾から、わたしたちは歴史家としての彼のアイデンティティがどれほど堅固であり、これを媒介にして一生を通じた自我統合の努力がいかなるものであったのか、そしてこのすべてがどれほど多くの可能性を内包していたのかを想像することができる。

しかし、現実的な見地からすれば、歴史家になろうとした彼のアイデンティティは、彼が33歳の春に書いた日記に出てくる次の一文に要約することができる。

²⁶『欽英』の記述がアナール学派の歴史叙述を連想させるというのは、つとに朴熙秉による奎章閣影印本の改題で指摘されている。

夜に、史官になる夢を見た。(1787年3月11日)²⁷

しかしながら、彼はこの夢の話を書いた後、死ぬ直前まで書いた日記において、再び史家としての志向や自らの歴史叙述に関連した言及をすることはなかった。ここにわたしたちは、この頃ある種の契機が彼のアイデンティティに衝撃を与えたのであろうと推測することができる。その契機とはすなわち、この日記の始まる頃には3歳であった兪晩柱の息子久煥が、長い闘病の末、15歳で死亡したことであった。久煥の死は兪晩柱が上に記した夢を見てから2ヶ月経った1787年5月12日のことであるが、この日以後、同年12月まで続けられた兪晩柱の日記は、ほとんど息子の死を悼む場として存在することになり、そこに歴史家としての兪晩柱のアイデンティティはもはや見いだすことができない。

兪晩柱は、失った息子に対する愛着と同一視をやめて本来の生活に戻るといふ正常な哀悼²⁸を行うことができず、ただ哀悼の期間を引き伸ばそうとする。これは死んだ息子と悲しみによってつながることで、息子の表象を永久に閉じ込めようという試みだと言える。このような精神病理的な悲嘆は、喪失した対象が自己愛的価値を持っている場合に表れる過剰反応としておよそ説明されるが、その際にある対象を失うということは自己イメージの一部分を失うことと同様である²⁹。彼は歴史家という自分の理想を追求しながら、一方ではそれが夢に終わるといふ不安を捨てることができなかつた。そのため彼は秀でた資質と自分に似た志向を持つ息子に自己イメージを投影した期待を抱いていた。彼が息子の死により克服することのできない絶望に陥ることになったのは、そのような期待が挫折したから

²⁷「〇夜多以史官。」(1787年3月11日)

²⁸「哀悼」といふ精神過程の忌祭と段階については、美國精神分析學會編、前掲書、pp.269-271を参照。

²⁹美國精神分析學會編、前掲書、p.307.

である³⁰。歴史家としてのアイデンティティが息子の死によって表明されなくなったのは、このような理由による。

先に、兪晩柱が根源的に持っていたアイデンティティが「物書き」というものから出発していることを指摘した。歴史家という志向は、その物書きの方向の中で自身の固有性と社会との連携という2つの条件を充足させることで一種の社会的自我となるが、息子の死とともに外部世界に対する期待を閉じ、このアイデンティティは消滅したと見ることができる。

3. 審美主義的な夢想家の虚構作り

兪晩柱の物書きはただ歴史家としての志向に関連するものだけだったのだろうか。個人が持つ固有のアイデンティティは明白な職分を通じてのみ説明されるものだろうか。この2つの質問に答えるため、わたしたちは兪晩柱が息子の死以降にも、そして自身の死に至るまで離れることのなかったエゴ・アイデンティティの一面を示唆する特定の内容を検討する必要がある。

兪晩柱は息子が死んだあと、それまで使っていた日記帳への書き込みをやめた。そして新たに空冊を編んで序文を付け、この日記帳に、息子のために最後の日記を書くと予告した。この序文で彼は息子への服喪の儀礼が終わる1787年12月1日まで日記を書き、その日記は息子に関する記憶を保存するためだとした³¹。

³⁰ 金何羅, 「일기문학으로서의 『欽英』 연구」 서울大學校 碩士學位論文, 2001年, pp.70~76.

³¹ 『欽英』の最後の巻である第24冊に該当するこの日記の実際の記述内容も、息子の遺稿を収集し書き写したものや、息子を失った父としての自責と自愧感、悲嘆を表すものが大部分であり、序文の言及と符合する。ところが、彼が最後の日記になると予告した1787年12月1日の日記を見ると「病のために喪服を脱げなかった」とあり、それから1週間過ぎた12月8日になってようやく息子のために祭祀を行い喪服を脱いだとある。人のなすことは常に予測した通りに進まないものである。

ところで、彼が最後になると予告した12月1日の日記には、1つの長く奇異な目録が添えられており、読者を当惑させる。この目録は、ある広大で美しい園墅^{えんじょ}〔庭園と建物〕を構成する百余個の建築物と、景観を成す自然物の名称をカテゴリー別に1つずつ分類して羅列したものである。兪晩柱はこれらの名称をもつものが最終的に構成されることになる空間に「臨華洞天」という名前を付け、「不遇な大丈夫〔男〕が住む所」という意味を付与している。ただ名辞だけで構成されたこの見知らぬ空間は、彼とどのような関係を持つがゆえに日記の最後に念入りに記述されているのであろうか。

この理想郷的な空間の名前、すなわち「輝く美しさに出会う」という意味に解釈される「臨華^{リンファ}」という言葉が兪晩柱の日記に最初に登場するのは1775年11月6日のことである。この日、21歳の彼は『臨華制度』という著述のアイデアを着想したと述べた³²。『臨華制度』は、34歳を前にした兪晩柱が臨華洞天を構成する名称の目録を記して自らの日記と生涯を終えるまで、何度も見られる彼のエゴ・アイデンティティのもう1つの面を捉える端緒となる。

兪晩柱は歴史家としてのアイデンティティを日記に表明しながらも、そのようなアイデンティティが具現した直接的な成果物である『三綱』は別個の著述として進め、日記から分離させた。これに対してもう1つの自分の重要な面貌が反映された『臨華制度』は、最初は別個の著述として企画したが、実は日記の中で著述作業を進めていた。そのためこの著述は断片的に日記のなかに混ざっており、未完成な状態であるが、その実際の内容

³²『史典』の巻数を縮めて『臨華制度』を草した（縮『史典』之巻、草『臨華制度』、1775年11月6日）。ここに出てくる『史典』とは兪晩柱が20代初めに編纂しようとした中国歴史書であり、先に言及した『三綱』の前身に該当する。その序文である「史典序」が兪晩柱の文集である『通園藁』にあり、参照されている。一方、この短い文章は、兪晩柱の内面に歴史書の編纂者と『臨華制度』という虚構的な叙述を編む審美主義者という2つの自我が併存する様相を示している。

を確認することができる。彼は自ら創造したこの虚構の著述に序文まで付けているが、その内容は彼の文集である『通園藁』に次のように伝えられている。

市街のような狭い世のなかでは崇高に過ごすことができないのを嫌い、清く明るい海山〔海に聳える山〕のような所に暮らすことができるようになったのは、安らかでめでたいことで、子孫に伝えるに値する。ちょうど泰山と衡山を夢遊したので、虚妄ではあるが臨華を心のなかに作ろうと思った。

奇峰が削り出たように並ぶこと、まるで廬山〔中国江西省の名山〕の金蓉〔金の蓮〕のようであり、澄んだ湖のなかが明るくて丸いこと、まるで賀老〔唐代の詩人・賀知章か〕の宝鑑〔貴重な鏡〕のようである。あちこちにある豊かな原と畑は中心から六洲へと通じ、翼のように整然と並び立つ家々は上方の星宿に倣っている。(…中略…) 橘柚が美しく実ること、まるで荆湘〔湖南省の洞庭湖付近の地域〕のようであり、竹林が鬱蒼としていること、まるで渭水〔黄河の支流〕の田家のようである。(…中略…) 机上には聖人の経典があり、思索し読む。家では徽公〔朱熹〕のように礼法を守り、粗野にも豪華にもしない。衛公のようにゆったりと生活して権力や地位の得失を笑う。徐市〔秦代の方士〕のように足跡を隠し、乱世の騒がしい俗世はなるままに任せる。

三韓は海の外の名のある土地を占めており、一度船を浮かべれば武陵〔桃源郷〕の神霊な境にも通じ得る。風俗がたいへん変わっており、けがらわしい田氏と竇氏^{とう}の権力争いのようなことから隔絶することができる。人里離れて心も遠く、凡国と楚国の興亡は夢にもそら寒く思う。だから世上と絶縁することをどうして嫌がるだろうか³³。

³³「厭寰市之湫隘、不尊厥居；餉海山之清昭、爰得其所。以安以吉、傳子傳孫。適因泰衡之

この序文によれば『臨華制度』の出発点は「狭い世のなか」という現実の欠乏が前提にある。俞晩柱は現実の欠乏に対応する「夢遊」を通して心の慰安を得ようとし、それがまさに「臨華」という空間を創造する重要な動機となった。三韓といているので朝鮮の境界内には存在するが、海のなかの島として現実と距離をおいて独立しているこの想像の空間は、野原と畑があって農事を行うことができ、橘柚が実っていることからわかるように、気候も穏やかで快適な所である。聖人（孔子）の経典を読み朱子家礼を守るということから、ここの主人が一般的な儒者の範疇に入る部類であることもわかる。美しい自然景観と整然とした人文景観が調和をなすなかで農業が主な生産手段となり、儒家的な価値観を持った一読書人が豊かな生活を営むというのは、朝鮮時代の士大夫が想像する平凡なユートピアの1つの姿である。ただ世上と断絶していることを強調し、とくに国家や政治の問題を排除する語調がこの理想郷の背後にある厭世主義の気運を感じさせるのみである。

俞晩柱は20代初めに、すでにこの『臨華制度』という著述を通して自分の理想郷の構築を始め、そのおおよその構造も早いうちから決定していたものと思われる。しかし彼は日記を終える時まで、この著述の細部の事がらを検討し修正したり拡張したりする手を休めなかった。そして彼の日記には、『臨華制度』を構成する断片的な夢想の記録が持続的に現れることになる。この過程において彼は理想郷の主宰者である想像上の自我に「鴻

夢遊、妄擬臨華之心構。奇峰列角削出、廬山之金蓉、澄湖印心圓開、賀老之寶鑑。鬱乎原疇之交錯、中通六洲、翼然亭館之森羅、上傲列宿。(…)橘柚玲瓏、宛是荆湘之域、篁竹陰翳、依然渭川之田。(…)案有聖人之經、且思且讀、家用徽公之禮、不野不奢、衛公生涯、堪笑權門之黜陟、徐市蹤跡、一任亂世之塵囂。三韓占海外之名區、一帆通武陵之靈境。風異俗殊、塵隔田寶之傾奪。地偏心遠、夢寒凡楚之興亡、何嫌與世絕乎？」(俞晩柱「臨華制度序」『通園藁』)

都学士」あるいは「鴻都侯」という名を付け、絶対権力を付与し、最初は6洲であった理想郷の行政区域に固有の名称を与え、その地形的特徴、当該地域の住民の主な生業などを具体的に叙述している。また既存の設定を修正する場合もときおり見られる。たとえば、兪晩柱は最初「臨華制度序」において言及したように、自身の理想郷を「島」という独立した空間としていた。遠くは海の外の神仙の世界に定着した徐市のような伝説上の人物と、近くは甫吉島^{ポギルト}に自分だけの世界を作った尹善道^{ユンソンド}〔朝鮮時代の文人・政治家〕のような現実の人物が、彼の想像力を刺激した結果である。しかし、兪晩柱は自分の理想郷についてかなり具体的に接近し、海のなかの島には瘴気という障害物が必ず存在するということに考えが及んだ³⁴。そこで彼は、陸地ではありながら、川の水が連環（2つの輪がつながっているもの。〇〇）模様³⁵にめぐっており、周囲から隔離された一区域を想像し、理想郷の構図を再び定めた³⁵。

³⁴「〇海のなかの島にも固より住める所は多い。ただ深い水に浸っているため理論上必ず瘴気がある。ならば決して湖や山のような平穏な居所に及ばない。須らく良い島を占拠しようと思えば、そこで毎年の生産物を徴収し経費として用いる程度であり、その島で日常生活を営むことはできない。〇甫吉島に入った者がやはり伝えるところによれば、人蔘で簾を編み四方に巡らすのは、また瘴気を防ぐためにそうしたのだと言う。海のなかの島には瘴気がないという者もいるが、わたしは信じない。（〇海中洲島、固多可居處、但積水所浸、理必瘴嵐、是則決不及湖山平穩之居。須要略占名島、徵其歲入以資經度、而不可起居茶飯於其中。〇入寶吉之島者、亦傳以人蔘偏簾四環、亦以其瘴氣而防之也。海島之無瘴者、雖曰有之、吾不信也。）」（1784年1月26日）

³⁵「〇聞くところによれば（この言は兪晩柱が虚構の内容を日記に記す時に時折使用する導入句である）、海の外に吉地があるが、それはまるで輪を連ねたような形である。〇〇輪が連なる所に大きな溪流が2本流れている。そうして1つの島が3つに分かれ、別れた3つは六洲となる。東丁は2千の家があり、中丁は1万の家があり、西丁は8千の家がある。東西2洲には農事をよくする者たちが住む。そしてあらゆる工匠と漁師と商人たちの家は宛在洲に住む。学士（鴻都学士、すなわち鴻都侯を指す）の家と庭園は礼樂洲にある。（〇聞海外有補地、形如玉連環。〇〇連環處、有大溪水雙隔之。於是乎一島三分、三分六洲、東丁二千家、中丁一萬家、西丁八千家、東西二洲、耕稼之功居焉、而百工漁採通易諸戶居宛在洲。學士園坵、于禮樂洲。）」（1784年5月9日）

このような彼の想像は、巨大な造景の設計図を描くための着想に近いという印象を受ける。この着想による世界は次のとおりである。まず川が流れ俗世から絶縁した清浄な土地に、蓮池や森、岩の絶壁など、自然景観を配置した後、調和良く共存する生産労働者たちの集落を区画し、最も中核的な位置に自分の庭園と邸宅を配置する。彼が最も念入りに描写するのはこの家と庭園であるが、「家の正面には大きな蓮池があり、園林を両側に置く」という大きな構図を定めた後、具体的な樹の種類まで挙げて庭園の造景植栽を設定し、庭園のあちこちで風景を観賞できるように楼阁を配置する。たとえば庭園に松、^{あおざり}梧桐、^{けやき}檜、^{いちよう}銀杏など百余種の美しい喬木を植え、その下には緑の芝を平たく敷き、赤や青の欄干を設置して木を保護し、その木がよく見える所に楼亭を作り、「鬱鬱蒼蒼」という扁額を掛ける、という具合である³⁶。このように理想郷に対する彼の想像は、設計図を描くことから出発し、想像世界を構成するさまざまな要素に固有の名前を付けることへとつながっている。そして彼は自分の付けた名称を記憶し継続する想像を日記に記録することで、自分の虚構の著述にある種の一貫性を与えている。

一方、彼はこの美しい庭園と邸宅のなかでの日常生活についても具体的に描写する。寝室に虎皮模様の案席を設置し、書画古董と地図、自鳴鐘時計を陳列するという具合に、内部装飾に関してはもちろん、衣装の材質や模様、毎食食べる食材の種類と調理法などに至るまで、衣食住のすべての面がその創造的描写の対象となる。

彼が描写した理想郷の各面は、造景から衣食住の構成要素に至るまですべて人工的な美を追求するという共通点を持つ。そのなかで彼が衣食住に

³⁶「〇臨有混沌時本百餘本、皆盤雲參霄、大卽三四連抱、盡是松、檜、梧、栢、槐、柳、銀杏之屬離立、衍板綠莎鋪其下、平如棋盤。(…中略…) 中置一亭、扁曰鬱鬱蒼蒼、下刻鬱蒼三字、填以金泥。」(1784年4月29日)

ついて記しているものを見ると、原色の絹に精巧な刺繍を入れたり、蜜や砂糖、各種果物といった甘く高価な食材を使って菓子を作り、金箔の装飾で整えるなど、ひときわ豪華で贅沢な印象を与える。

しかしこのような様相は、彼が歴史家として示している現実感覚とは相当異なるものである。平素彼は朝鮮の貧困を深刻な社会問題と認識し、その原因を分配正義が実現されないことに求めていた。人肉を食べる境遇にまでいたった残酷な飢饉と、色とりどりの巧妙な形象にこねて造られたさまざまな餅を礼物や賄賂として贈る贅沢とが共存する矛盾を見て、特定階層が富を独占する両極化した社会を問題視したのである。とくに彼はソウルの閥閥家〔国への功労と官爵の多い家〕で日常化していた贅沢を批判し、彼らが度を越して念入りを作る高価な食べ物を「食妖」とまで言った³⁷。しかし、閥閥家の食べ物と彼の想像世界にある食べ物のあいだに、たいして違いはない。

このような兪晩柱の矛盾は、ある程度は18世紀の京華世族という文化享有層に密接した周辺部に存在していた彼の境遇に関連していたと思われる。悪く言うならば、嫉妬しながらも内心では羨望する小市民的な俗物根性とまったく関係がないとも言えない。しかしより根本的にいえば、この矛盾は現実を直視しようとする歴史家の自我と、現実に存在しない美を渴求する審美主義者としての自我が、兪晩柱の内面に共存することで発生したものと見ることがより穏当であろう。

兪晩柱の日記において変化する風景の審美的な描写は、毎年反復する重要なテーマのうちの1つである。彼は月夜の情景、春花が満開の谷間、朝

³⁷「近有婚讎之饌送之婿家者、盤上止一花盆、而百花齊開、衆菓交實、色色形形、窮真極巧、皆是餅餌之屬、啖而味旨者也。是制、蓋昉於逆賊洪國榮在宿衛所時、獻媚者所爲云。(…中略…) 制餅餌以童子形而色、其佩飾以雜讎食中、自首而啖之、以爲奇異。其始爲此者、殆甚於作俑人之相食、不祥莫大、並與花盆而俱可謂食妖也、宜亟斷棄之、不復形諸目也。」(1784年10月16日)

日に照らされる氷結模様など、時間の流れのなかで出会う風景の刹那的な美を捉え描くことに熱意と才能があった。だが、彼の描写には美と侘しさが奇妙に織り込まれている場合が多く、これが彼特有の美意識を形成している。月と花を見ると心が詰まるようだと³⁸、満開の花を見ても落花を憂える彼の姿からわかるように、今見ているものが永遠ではないという展望、つまり美が儂いものであるという悲しみが描写に投影されているからであるが、これも美に深く魅惑された人にありがちな姿である。

また何よりも審美主義者として彼が特別なのは、野花一輪から天上を発見するブレイク (Blake, 1757-1827) 的な想像力³⁹に関連している。26歳の俞晩柱は、自身の庭の檀木〔斧折樺^{おのおれかんば}〕の下の草むらで淡紅色の蓼^{たて}の花と青い鶏頭^{けいとう}が純朴に咲いているのを見て、「この花のおかげで荒廃した現実を抜け出し蓬萊と瀛洲のような神仙世界を想像することができて嬉しい」と言い、この花に自分の想像を投影した名前を付けた⁴⁰。このように現実の小さな美を発見し、微細な存在がそれぞれに持つ小宇宙を描き出す彼の視線は、時空を超越した美しい想像の世界を構築するきっかけとなる。『臨華制度』という著述を引き出す1つの推進力も、このような審美主義者としてのアイデンティティにある。想像のなかの臨華洞天に大きな湖を作り美しい木々を植える彼の姿はこのような観点から理解される。

ならば先に述べた衣食住のすべての面にわたる執着に近い想像上の細部描写は、どのように接近するべきであろうか。まず、このような描写に表れた古董書画趣向や精練され趣きのある生活への志向は、その時代を風靡

³⁸「花月有纏綿意。」(1785年3月25日)

³⁹「一粒の砂から世界を見て／一輪の野花から天を見る (To see a World in a Grain of Sand / And Heaven in a Wild Flower)」はブレイクの詩句の一語である。

⁴⁰「○檀木下有草開花、色澹紅、或謂是江岸所生紅蓼花也。石埕上亦有草花、色純青、俗名鷄甲花也、青非花之恒色、故視或似三島奇花。余所處一草芟也、蓬蒿翳如、虫蚊狼藉、荒楚甚矣。而幸賴二花无心而開、得令余起蓬、瀛之想、寓江湖之趣、其豫我性灵多矣。遂錫嘉名單曰僂嶠青、蓼曰乾湖紅、欲賦詩以顯之、而未果也。」(1780年7月5日)

していた明清小品文の世界と深く関連している。俞晩柱は明清小品文を好んで読み、それを抄録し、その作品が具現する世界観について「貧窮にやつれた儒者が自ら快活に生きてみようとする方式」だと自ら規定したこともある⁴¹。生活や経験から美を発見するというこのような態度は、大きく見れば生のあり方を芸術の精神として扱うという審美主義的な人生観とも一定の関係を持つ⁴²。

しかしながら、俞晩柱の物書きが明清小品文と区別される点は、生活を構成する事物についての描写が「虎柄の中国の几^{つくえ}と猩猩色の日本の屏風」⁴³という具合に極端に具体的で仔細であるということ、そしてその描写が小品文の志向する素朴で実現可能な日常を表象するのではなく、現実的な日常を抜け出した華麗で異国的な雰囲気を作しているということである。さらに彼は理想世界の構成員となる明清文人たちの名簿を作成し、彼らがそのなかで自分の友となり筆談を交わす状況まで想像して付け加えている⁴⁴。

ある面において、「臨華」という理想郷に関わる彼の物書きから見出される最も具体的な内容は、俞晩柱の趣向だと言える。これによりわたしたちは、彼が好み欲した木や草、服、食べ物、家がどのようなものだったかを知り、彼の文芸趣向や、彼が自分と同一視して友人にしたいと思っていた人間類型について推測することができる。

だからといって、この臨華の話は一個人の趣向と嗜好を収集した単純な

⁴¹「○《短短横牆、矮矮疎窓、一方兒小小池塘、高低疊嶂、綠水邊旁也。有些風、有些月、有些香、日用家常、竹几藤床、儘眼前水色山光、客來无酒清話何妨？但細烘茶、淨洗盞、滾燒湯。》世間窮酸之儒、自作快活儘如此、却善形容。」(1783年5月22日)

⁴² 審美主義的人生観については、R.V. Johnson, 이상욱 譯『審美主義』서울大學校出版部、1979年、pp.32~39を参照。

⁴³ 「豹文猩光、唐几倭障。」(1784年10月16日)

⁴⁴ 「○忽痔劇腹暈、初夜服純薑茶。東而敬告碑、南論樂志、北記桃源、竝一十二回。三方各排錦氈、四各陳棊几、二外紅照兩兩十枝。供筆談選王伯安、沈啓南、王元美、錢受之、董玄宰、陳眉公、文徵仲、顧寧人、柴栢尊者。」(1787年5月1日)

目録に終わるものではない。最初に兪晩柱は想像のなかの理想郷と美しい庭園を設計するという方式で自分の夢を記録し始めた。ただ、そのような物書きは自らが創案したものではなく、当時、朝鮮知識人層の一角を風靡していた「意園記」（想像の庭園についての記録）という様式を受容した結果である⁴⁵。この様式については文学研究者のみならず造景学研究者も注目しており⁴⁶、そのことからそれが一種の「設計図」としての特徴を持つという点を確認することができる。ところで、兪晩柱は理想郷と庭園の設計図を描くことにとどまらず、そのなかにさらに小さな家財道具と人物を含めた細密画を描くような物書きをしている点で、通常在意園記を書いた作家と区別される。彼自らも自分の虚構の物書きについて『将就園記』といった意園記と『水滸伝』のような小説をともに例に挙げて正当化しているが⁴⁷、兪晩柱は随筆に該当する明清の小品文に着眼して設計図を描き始め、その後より写実的な虚構構築を試みた小説を参照の対象とし、その設計図を立体化していったのである。彼は背景に最も集中して描いているが、後になるほど人物や事件に関するものも考慮の対象に含めるようになる。たとえば、実在人物であり彼が重要だと考える明末清初の文人・銭謙益を論評者として登場させ、雨霰と宝玉を混同する価値混乱の状況についての寓話を創作したり⁴⁸、理想郷に宝玉の出る井戸があり富の源泉になったとい

⁴⁵ 안대희 「18, 19세기의 주거문화와 상상의 정원」 『震檀學報』 97, 震檀學會, 2004年.

⁴⁶ 안대희 「通園 兪晩柱의 造景美學」 『韓國傳統造景學會誌』 27, 韓國傳統造景學會, 2009年; 홍형순 외 「19세기 문인 沈澣 홍길주의 「孰遂念」 에 관한 조경학적 고찰」 『韓國傳統造景學會誌』 24, 韓國傳統造景學會, 2006年.

⁴⁷ 「○およそ言葉で表現し文を書くにおいて誠でないことを憚らないならば、虚構の著述を著すに一、二巻でもかまわず、数十巻でもかまわない。試しに『将就園記』や『水滸伝』などの諸記志を見るがよい。(○夫出言爲文、苟不殫於不誠无宗、則劈空撰著、一二卷亦可、數十卷亦可。試觀『將就』『水滸』諸記志。) (1784年3月9日) 小説の読書が兪晩柱の虚構構築に及ぼした影響についての詳しい言及は、金何羅「유만주의 『수호전』 독법」 『韓國漢文學研究』 48, 韓國漢文學會, 2011年を参照。

⁴⁸ 1783年11月6日条。

う顛末⁴⁹を想像し提示するなど、微細ながらも虚構世界を構成する人物や背景という要素を具体化し拡張して、叙事として挿入する余地を示しているのである。つまり、この理想郷に具現された虚構の背景と、虚構であるが写実的なディテール、虚構の話を展開する実在人物は、彼の虚構の構築が背景と人物と事件を創造しつつ、近代的な意味における小説に向かっていることを示唆する。

だとすれば、この未完の虚構が盛り込んでいるのはどのような話であろうか。

まず、この虚構は個人の趣向がどのようにエゴ・アイデンティティを構成するのかを示す1つの内面的な叙事であると言える。兪晩柱の趣向において最も明白な特徴である審美主義は、その当時は社会的にあまり歓迎されなかった。職分に忠実で公的価値に献身する人間を高く評価する雰囲気の中なかで、ただ美に没頭することは、根本からかけ離れた無意味な行為と見なされたのである。そのため、このような審美主義的な人間類型は「花でも育てて詩でも詠って暮らす落ちぶれ者」と後ろ指を差されたものと思われるが、兪晩柱はこの指目を自分への攻撃と受け止め憤慨する一方、このような趣向が現実における生活および社会的理想と背反するものではなく、個人の心を育てる一助となるものだと擁護した⁵⁰。彼はつとに「いぼやこぶも自分の肉だ」⁵¹と言ったことがあるが、利用価値とは無関係の、個人の多様な姿が自我を構成すると見る立場であった⁵²。

⁴⁹ 1784年2月2日条。

⁵⁰ 「○或傳有以蒔花吟風、爲破落戸者、無本領而徒吟風、沒經濟而但蒔花者、固自破落戸、若或不然、而吟蒔以助博雅之趣、則不必盡驅之以三字惡語。」(1784年閏3月13日)

⁵¹ 「○贅疣猶屬自己之肉。」(1782年5月17日)

⁵² このような彼にとって個人の趣向が受容される余地がなく見える朝鮮社会は荒廃した不毛地に思われた。彼は自身が本で接した世界各国—主に中国であるが—の多様な文化に憧憬してもいるが、彼のこのような姿は朝鮮物の粗雑さを嫌い、中国の物産を好む一種の異国趣向として発現している。

だからこそ兪晩柱は、偉大な歴史家になろうとする社会的な自我の一面にこの上なく忠実であったように、固有の趣向に没頭しようとする内面的な要求も無視しなかった。そしてその内面の重要な部分を占める審美主義者の自我を認める態度は、日記全体を通して持続的に現れる『臨華制度』の断片を通じてたやすく確認できる。

しかし、それとともに、彼には公的価値を内面化した超自我もまた途切れることなく働いている。彼は自身の夢想を念入りに記録することに快感を得つつも、同時にそうして虚構を想像し築造する行為について、「心身を病気にするだけで少しも益がない」⁵³と言ったり、「これは病気である。自分の根本となる変わらないあるものを壊すことに帰結する」⁵⁴と言い、罪意識の混ざった反省をし、いつも否定しているのである。今のわたしたちにも自分の内面に没入することを身勝手な行為だと思い、あるいは無価値で反社会的な逸脱だと見なそうとする傾向が歴然と残っているが、18世紀朝鮮社会においてはそのような視線がさらに強固であったものと思われる。そのなかで兪晩柱は、虚構を想像し叙述する作家としての自身について、歴史家としてのアイデンティティを表明することと同じほどの自信を持つのは難しかったものと思われる。

結局、「臨華」に関するこの内面的な叙事は、自分のような人が容認される余地のない文化の不毛地である朝鮮の土地から逃避し、自身の趣向を極大化した理想郷として内的亡命を試みながらも、一方では分裂的視線でそのような自分を俯瞰し否定する一種の審美主義者の心の軌跡を含んでいると言える。

次に兪晩柱の理想郷は、日記の他の側面に描かれた彼自身の現実と対比した時、もう1つの物語を示している。彼の理想郷に見られるディテール

⁵³「○巧鑿虛空、想像擬議、止病身心、何益分毫？」（1784年1月23日）

⁵⁴「○是病也、巧其想、設其制、終歸於賊伊元常、非病而然與？」（1784年10月25日）

の壮大な拡張は、欠乏と挫折が増加する方向へと進められた彼の人生とほぼ軌を一にする⁵⁵。現実的な境遇において挙子であった兪晩柱は、度重なる落第により、歳月が過ぎるほどひどい劣等感に苛まれ、自らの至らなさに対する自覚のために妻との関係も円滑にいかなかった。千古を包括するような博学を熱望しても、現実には科挙落第生であり、^{みやび}雅で趣きのある日常を夢見ても、妻の冷遇により四季を同じ服で過ごし、時には食事に取りつけないこともある彼の哀れな姿は、そのまま理想世界のなかの巨大な図書館の所有者であり、季節ごとに華麗な衣装を着て、食事は豪華な物を食べる彼の創造的な自我、鴻都侯に対応しているのである。

そして兪晩柱の欠乏と挫折を反映したこの想像上の叙事は、先に言及したように日記の終わりに提示された1つの目録で結末を迎えることになる。死を前にして理想郷に対する夢を総整理し、その構成員を1つずつ呼名するこの目録には、それまで兪晩柱が虚構世界を築きながら付けた名前だけでなく、彼が現実を生きて意味を付与した家や木々の固有名詞も随所に出てくる。こうして彼は自分を生涯支えてくれた夢想と自分の思い出とを1つの場所に描き入れた細密画を描き直し、自分の物語を終結させたのである。

4. 分裂と矛盾の自我

職分のない士大夫知識人という境遇において、自分が誰なのかを解明するために、自らの才能や望む職業、趣向、欲望の問題を生涯探求し続けた兪晩柱が到達した所はどこであったのか。

晩年の兪晩柱が見つめる自己の内面は、それ自体として矛盾状態に近い。

⁵⁵ 兪晩柱の現実的欠乏とそれによる自己形象化方式については、金何羅「한 주변부 사대부의 자의식과 자기규정」『奎章閣』40, 서울大奎章閣韓國學研究院, 2012年を参照。

彼は「小人の心で君子の事を行い、凡夫の心で学者の事を行い、腐儒〔役に立たない儒者〕の見識で英雄の言を述べ、無頼の見識で品格の言を述べる。それはまことに、あしけの馬か豹のようにまだら模様である。全世界のなかで、この1人だけがこのようである」⁵⁶と言い、自己内面の小人と君子、凡夫と学者、腐儒と英雄、無頼の輩と品格のある人がなす矛盾を、白と黒の毛の混ざったあしけの馬や豹のまだら模様として形象化した。このような自己形象化はまず理想と現実との間の克服できない乖離を直視したことから出発したものと思われる。彼が自分の現状を凡夫や腐儒と言ったのは、おそらく学問的に成就した非凡な歴史家という理想と、外面上は独り歴史書を読むことを楽しむ一介の平凡な士人という現実との間の格差を念頭に置いた自己規定なのであろう。歴史家としてのアイデンティティは確固たるものであったが、これと関連して自分の存在意義を公式的に確認する機会を生涯得られなかった彼は、理想と現実との間の乖離にひどく苦しみ、自分の現状を過小評価した。「最も高い所にいる心、最も低い所にある身体」⁵⁷という彼の言葉は、このような現実認識と自己規定のあり方を最も簡明に示している。

また彼は、自らの高潔な志向といやしい現状がもたらす矛盾した状況に苦しみながら、その矛盾自体を直視し描写の対象としている。歴史家としての気高い理想と醜くいやしい現状はもちろんのこと、美しくはあるが荒唐無稽な夢想までも含んだ多様な面を自分の一部と見なし、それを描いた自画像は、彼自身にとっても見慣れないものであった。このような見地から「わたしもまたわたしを畏れる」⁵⁸という彼の言葉には、曖昧で不確実

⁵⁶「○以小人之心、而行君子之事、以凡夫之心、而行學者之事、以腐信之見、而道英雄之言、以无頼之見、而道有格之言、眞駁若乘騅、斑如窺豹矣。似六合之裡、止伊一人。」(1784年10月20日)

⁵⁷「○上之上斷、心。下之下斷、身。」(1785年12月16日) 引用した原文のなかで小さい字で「斷」とあるのは著者が自分の文に入れた句読の印である。

⁵⁸「豈徒畏人？我亦畏我。」(1785年12月2日)

な自我に対面した時に感じる恐怖の感情が含まれていると言える。

彼は結局、矛盾と曖昧性と不確実性のなかに自らを残したまま日記を結んでいる。ただそのなかでくっきりと残っていると言えるものが、歴史家としての自我ではなく、臨華洞天の主人である想像の自我という点には示唆を受けるところがある。彼の内面を豊かにし、自由な想像力を最後まで失わせなかった『臨華制度』の作家としてのアイデンティティは、ある意味では矛盾と不確実性を抱きしめることのできる能力から出たものなのかもしれない。

(榎谷祐一 訳)